

指揮官の母港@バカハーレム

そうすけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

指揮官の担当する母港はバカしかいらしい。その上愛が重かったりする。

過去作品の要素をちよつとずつ継承する予定です。

以前頂いたリクエストはこちらでうまく組み込んでみたいと思います。

目次

登場人物@みんなバカ	1
母港での隠し撮り対象@指揮官	16
例の対策@一筋縄にいかない(前編)	33

登場人物@みんななバカ

「ここが僕の担当する母港か〜」

港の方から見える立派な建物に目をキラキラさせながらテクテクと歩いている。母港つて歩いてても着くんだなあ。どこが入り口か分からないけど、守衛室つぽい所があるのでそこかな。

「長旅の移動、大変お疲れ様でした。ご主人様」

タイミングを見計らったように出てきて深々とお辞儀をしたのは、綺麗で長い銀髪のメイドさんだった。やけに胸元の布が足りないのは何故だろう。間違えてコスプレ喫茶に入店しちゃったかな？

「私はロイヤル陣営所属、ベルファストと申します。ベルなり、メイド長なり、『妻』なり、『家内』なり——何なりとお呼び下さいませ」
「他人を妻と呼ぶのってかなり珍しいと思うよ!？」

思わずツツコミを入れてしまったけど、彼女なりのウエットなジョークだろう……と思いたい。目に光が灯っていなく、瞳孔が開きっぱなしなのに目を瞑れば。

なので僕も気の利いたジョークをかます。

「僕の事は『ダーリン』って呼んで——モガアツ!？」

「ご主人様の性癖は何ですか？ フェチは何ですか？ 子供は何人欲しいですか？ ご主人様の望みとあらば多種多様なプレイにも従事致します」

僕の両腕をガッチリ掴んで壁に背中を押し付けられると、ベルファストさんとはんでもなく涎を垂らし、息を荒げながら呪文のように唱える。掛かってしまっているかもしれない！

この状況を抜け出すには『あの』セリフしか無いだろう。まさにこの時しか言う事がないような——。

「ぼ、僕は食べても美味しくないよ!」

「味見はメイドの嗜みでございます☒」
逆効果でした。

実際に手を出された訳ではなく（結構危なかった。かなりの質問攻めに遭っただけで済んだ。食事の好みや味付け、風呂、トイレの長さ

——刑務所でもしなさそうなんだけど……）

「そういえばご主人様。ここの港で随分と迷われたのではないでしようか？」

ようやく敷地内の案内が始まると共にベルファストさんが問いかけた。迷う？

「ご主人様の乗船した船が見当たらなかったもので」

ああ、そういう事か。だけど僕は船で来ていない。

「僕は歩いて来たからね」

「歩いてですか!?!」

純粹に驚かれた。僕にとっては先程のベルファストさんの変貌の方が驚きなんだけども。

「あそこの河川敷から登って歩いて来たんだ。歩いて10分だよ!」

「ご主人様は随分とワイルドな事をしますのね。ますます惚れてしまいます」

え? どこに!?

まあベルファストさんの言う通り、僕もクルーザーのような船で来る予定だった。でも配属先が決まった時に上司から『お前、家近いか

ら船乗らなくて良いよな？ あそここの河川敷から登って行け』と渡されたのは、一本のロープ。この上司はバカなんじゃないか？ って思ったね。

ベルファストさんの後ろを歩いていると、左右から鋭い視線を感じた。一人は赤い髪で白い軍服のような衣装を纏って腕を組んで見下ろしている。もう片方はベルファストさんのような長い銀髪に黒いドイツ風の軍服を着……崩している(どうして胸を出す必要があるんですか)

どちらも組織の重鎮なのだろう。これから自分達を指揮する人間を品定めするのは当然だ。目が合ったのでとりあえず会釈をしておく。

「ご主人様、如何されました……ああ、二人から温かい目で見守られていらつしやいますね。ふふ」

「あれ温かいの!？」

「ご安心ください。あの二人は、『大型犬』と『にくすべ』でございます」

「ご言いますと言われても何一つピンと来ないんですけど!? 暗号か何かかな?!

「折角ですし、御二方に顔合わせの挨拶に行きましょう。どちらから先に行きますか?」

大型犬とにくすべの二択かあ……どちらもブラックボックスに間違いは無いんだけど、大型犬の方がまだ想像ができる。意外と甘えん坊なのかな?

「大型犬……の女性で」

人を犬呼ばわりする事に何の違和感無いのは自分でもどうかと思っただ。

「ご機嫌麗しゅうございます、モナーク様。今日から私達の指揮を執るご主人様でございます」

遠目で見えていたからそこまで分からなかったけど、大型犬言われる

だけあつて背が高くくてスタイルが良く、デカいところがデカイ。見ただけで速度が下がりそうな威厳を放っている。

「貴様が指揮官か。お初にかかる、私はモナーク。ロイヤルは、私に頼らなければならぬ程に落ちぶれたというのか……」

ダウンー気味なのか、モナークさんは気怠げに話す。ロイヤルが落ちぶれてる？ ベルファストさんのようにしつかりした人がいるのに？ ひよつとしてこの母港はヤバイ？

「あれはモナーク様の『構ってちゃん』モードでございます。構ってあげては如何でしょうか？」

若干の不安を考えていると、ベルファストさんがフォローを入れてくれた。そんなチュートリアルみたいなの……何が良いだろうか。姉妹の話題でも振ってみよう。

「モナークさんにはどんな姉妹がいるの？」

「は？」

「ヒエツ」

どうやら地雷ワードだったらしく、ドスの効いた低音ボイスで切りつけられる。

「……ウエールズやヨーク。もしかしたらアイツらを妹と呼べたかもしれないな」

気怠げながらも話す言葉には、妹を想う気持ちを感じ取れた。

「モナークさんは優しいんだね」

「……私はそんな柄ではない」

ぶいっとそっぽを向かれてしまった。

「流石ご主人様です。あともう一押しですね！ このまま彼女をオトしましょうー！」

「僕は恋愛ゲームしてるんじゃないんだけど!？」

おかしいなあ！ 僕は指揮官として来た筈なんだけどなあ!？」

「これから宜しくね。モナーク『お姉ちゃん』！」

茶目っ気混じりに握手を求めてみたら、モナークさんにエグい力で引っ張られて、抱きしめられた。モナークさんの柔らかさと強い抱き締めで痛いクッションに寝転がされている感覚に陥る。

「もしかして、私はお前と出会うためだけにこの世界に具現化されたのかもしれない。だとすれば…それだけで幸せだ」

プロポーズRTA記録更新です！ だから最初にモナークさんを選択する必要があったんですね。

「もしかして大型犬って……」

グツ、と小さく親指を立てるベルファストさん。こんなんでええんか？

「モナーク様、お楽しみ在所大変申し訳ありません。ご主人様には母港の皆様と顔合わせをするお仕事がございますので「どけ！ 私はお姉ちゃんだぞ!!」

気迫ある声に反して喋る内容がバカっぽいのに、瞳孔が開きまくっているのがギャップとして面白すぎる。

「僕にはまだ仕事が残っててね。行かなくちやいけないんだ」

「仕事と私、どちらがお姉ちゃんなんだ!？」

「モナークさんがお姉ちゃんだから、仕事がお姉ちゃんなんだよ」

「そうか……」

モナークさんはなぜか納得し、解放してくれた。自分でも何言ってるのかよく分からないけど、やったぜ。

淀んだ瞳で見てくるモナークさんを尻目に、僕らはもう一方のルートへ歩き出した。

「そういえば『にくすべ』って何なの？ コードネームか何か？」

「私から告げても構わないのですが、やはりご本人様から理解して頂くのが尤もだと思われます」

にくすべとは何なのだろうか。nikusube? 肉術? 頭

の中でぐるぐると考えてみてもそれっぽいアイデアは出てこない。

「ご機嫌麗しゆうございます、グラーフ・ツエツペリン様。こちら様

が、今日からこの母港の主となるご主人様でございます」

「ああ、先程から遠目で見ていた。鉄血陣営所属、航空母艦、我が名はグラーフ・ツエツペリン。さあ条件が全て揃った。では開幕するとしてよう……終焉のシンフォニーを」

なかなかパンチの効いた自己紹介を受ける。グラーフさんは変わった表現をするなあ。

「ところで卿よ、一つ聞きたい事があるのだが――」

グラーフさんは毅然とした態度のまま、僕に近づいた。

「どうして我では無く、モナークを選んだ？ うぐつ……卿は私の隣に立ちたくなかったのか？ えぐつ……我は、われはあ……」

どうやら先にモナークさんの所へ行ったことに不満があるらしい。まさかこんな厳格な雰囲気からガチ泣きをするとは、思いもよらなかった。案外、親しみやすい人なのだろうか。

「グラーフ様、ご主人様の体は一つしかありません。ですが、こうやってグラーフ様の元へ来て下さったではないですか」

「うぐつ……どうして、体は一つしかないのだ。『憎んでいる。全てを』」

「ご主人様、来ましたよ！ 『にくすべ』の正体が！」

エキサイトしたベルファストさんはイキイキと腕を振り下ろす。

「え？ どこに？」

何か召喚した？ 辺りをキョロキョロと見渡すがそれらしき人物は見当たらず、泣いているグラーフさんしかいないけど……。

「先程のグラーフ様の言葉を思い出して下さい。自ずと答えは見えて来ます！」

先程の？ ええと、終焉のシンフォニー？ 違う。卿？ これも違う。『憎んでいる。全てを』。にくんでいる、すべてを……にく、すべ――。

「……あっ!!!　そういうこと?!」

「左様でござります。やりましたね!」

合点がいった勢いでベルファストさんとハイタッチをしてしまった。そんな光景をグラーフさんは面白くないようで、

「全てを破壊すべきか、憎むべきか……卿を攫うか」

仲良く見えている僕らを見て、暗黒のオーラを解き放っている。

「こ、こほん。グラーフさんは鉄血のリーダーなの?」

話題を変えようと無理矢理話を振った。

「――!　いや、我ではない。鉄血のリーダーはビスマルクという者だ」

話を振られた事に喜びの表情を一瞬だけ見せ、すぐにフォーマルな表情に戻る。ビスマルクさんか。後で顔合わせをしよう。このグラーフさんを従えるって相当な器量だよ。

「ところで卿はいつ我とケツコンするのだ?」

「……へ?」

ところでの話題じゃないんだけどなあ!　ノータイムのボディブローはキツイですよ!?

「神社のおみくじを引いたら、『運命の人・向こうから求婚してくる』とあったからな。そうではないのか?」

当たり前だろ?、みたいに首傾げるのかわいい。やっぱにくすべだわ。

「グラーフ様。恐縮ですが、おみくじは何回引かれましたか?」

「30回だ」

「リセマラしてんじゃないよ!」

中々個性的な二人と顔合わせを終えたので、これから建物内の執務室に向かつていくところだ。

「こちらがご主人様の執務室になります」

「わあ……すごい広い……」

案内された執務室は言葉通りに広い。例えるならホテルのエントランスロビーくらいかな。

「長旅……でお疲れの所申し訳ありませんが、これからご主人様は講堂に向かい、母港の皆様へご挨拶をしていただきますが宜しいでしょうか？」

「分かった。僕はもう準備整ったよ」

長旅（徒歩10分）だったので、近所のスーパーに出かけたくらいの疲労しかないや。いよいよ母港の皆さんとおでました。

「かしこまりました。ではご主人様、一つご忠告を——」

「うん？」

「私達、母港の皆さまはモナーク様やグラーフ様に負けず劣らずの個性的な方々しかおりませんので」

「……なんとなくは想像してた」

目の前のベルファストさんがもう個性的だもん。あまり動揺はしなかった。

「おお……確かに個性的、というか。髪の色がみんなカラフルだね」
「色とりどり、といった所でございませうね」

講堂の舞台裏からこっそり、皆んなの様子を見てみた。髪の色はも

ちろん、頭に動物の耳がある子がちらほら見えた。本当にここ、コスプレ喫茶じゃないよね？ 僕、勤務場所間違えていないよね？？

「では私はアナウンスをして参ります。準備は宜しいですか？」

ベルファストさんがインカムを装着し、舞台の真ん中まで歩く。

『大変お待たせ致しました。皆さま、ご主人様が来られても、くれぐれも眠らせたり、攫ったり、媚薬を盛つたりはしないように』

ベルファストさんのジョーク？ なのか会場は盛り上がっているようだ。明らかに不穏なワードしかないのに何で盛り上がるんだ……。

『ですが不快を与えなければお触りはOKです』

「「「やりましたわ!!!」」」

「何処が!？」

大人のお店みたいなアナウンスにギャラリ―は一層盛り上がる。

これ大丈夫!? 風営法機能する!?

『ではご主人様にご挨拶をしていただきましょう』

ベルファストさんのアイコンタクトが飛んでくる。この状態で表に出るのは、紐のないバンジージャンプのようなものではないだろうか。挨拶ひとつでこんなに尻込みするとは思わなかった……。

「みなさん、初めまして。今日から皆の指揮官を務めます」

一礼をする。

「指揮官チョーカワイくね!？」 「高雄ちゃん、指揮官をお持ち帰りつて可能かしら?」 「まずは常識を持ち帰れ!」 「指揮官さまあゝ♡

ようやく会えたね♡」 「大鳳はいつでもお仕えしております♡うふふ♡」 「あれが指揮官か……」 「どうしたのウェールズ? ヨダレがヤバいわよ?」

指揮官を見る目が完全に獣と化しているKAN—SENのみんな。このまま帰ろうかと思つた時に一人の女性のヤジが飛ぶ。

「オイ、大丈夫かあ？ こんな弱そうな奴でよお——ヴグツ!」

「ちよつと、ワシントン！」

やや乱暴な口調の銀髪の女性に注目が集まる。銀髪多くない？

挨拶した2／3も銀髪だったし。

ワシントンと呼ばれた女性は金髪の女性に肘打ちを喰らっていた。

まあそういう声も挙がるよなあ。でもそろそろ止めに行こう。着

物の人達の殺意が今にも爆発しそうだ。

「まあそういう所もあ「いい豪胆ぶりだよ、ワシントン！」え？」

割り込みで入ってきた声の方を見てみると、緑髪の女性が高らかに

笑う。もしかしてフォローをしてくれるのかな？

「そういう人ほど指揮官のつよつよビンビンオチ○ポにメス堕ちするってものさ！ ははは！」

フォローどころか爆弾が落ちました。指揮官に男優として期待しすぎちゃいます？

「は、はあ?」

「それとも催眠堕ちしてアへる誘い受けかな？ 私はそれでもオカズになるが！」

あれかな、圧倒的に男子生徒が少なく女子生徒が大半の学校かな？ 開始5分くらいで、講堂に下ネタが平然と飛び交う母港になりました☆

「自分の性癖晒してんじゃねえよ、リットリオ！ おい、指揮官！」
突如ワシントンさんから指名を受けると、彼女は顔を真っ赤にしな
がら、

「アタシはアンタのイチモツに屈しないからな！」

それ絶対負けるヤツじゃないですか。

『ご主人様の賛美たるご挨拶、誠にありがとうございます。最後に
ご主人様には秘書艦を決めていただきます』

締めとなる最後の行事が言い渡される。秘書艦かあ。最初だから
誰でも構わないんだけど、皆んなにとつてはそうじゃないんだろう
なあ……。手鏡で化粧のノリを確認する子や『私が良いですよ！』と
言わんばかりに目が血走ってる……。ここはミスコンの優勝じゃない
からね!?

「皆さん気合い入れすぎじゃない？ ミスコンの間違いじゃないよね
？」

僕はこっそり司会のベルファストさんに疑問を投げる。

「それくらいにご主人様に期待している、という事でもありますよ。
お望みとあれば、ミスコン開催致しましょうか？」

皆様喜んで参加しますよ、と茶目つ気混じりのウインクを受け取っ
た。秘書艦を決めるのにこんなに悩むのに、ミスコンなんて想像を絶
するほど難易度が高そうだ。

秘書艦を決めなきゃいけないんだっただね。もうベルファストさん
にしようかと思っただけど、彼女はメイド業務もあるし、メイド長とし
ての仕事もある。その上こういった催し物の司会も担当。そこに秘
書艦業務を追加するならば、流石に過労死するレベルになるので出来
るだけ避けたい。となるとモナークさん？ 彼女の依存度だと用が

ある子さえも威嚇しそうだ……にくすべ——グラーフさんが良いのかもしれない。雰囲気は秘書艦向いてそうだし。

「じゃあ秘書艦は、グ 「ニ「グ?!?」「ニ」」

一部の子達は頭文字に目がカッ開く。きつと『グ』から始まる子なのだろう。逆に付いてない子達の容態がヤバい。魂が抜けて21グラム減っていそう。ええと、何て言おうとしたんだっけ。グラーフさんか。

「お水をお持ちしました、誇らしきご主人様！」

「へえ!？」

「「「「「は?」「」」」」」

まさかの予想外すぎる事態に変な声が出た。何で水素水サーバーごと担いでるの!? その銀髪ショートのメイドさんはベルファストさんよりも肌の露出が多い。しかも本人は真面目でやり切ったような顔で担いでるのが僕の脳内処理を更に拒む。

「……シリアス、今は給水の時間ではありませんよ?」

ベルファストさんは笑顔ではあるものの、こめかみから血が出そうなくらい青筋が浮かんでいる。

「あ、あれ? 今ご主人様は喉が乾いているものかと……」

水素水のメイドはオロオロと戸惑っている。もしかして『グラーフさん』の『グ』を喉が詰まったと解釈したのだろうか。そこで水素水サーバーを担いでくる発想よ。

「じゃあ、お水を貰おうかな……」

「ご主人様!?! 気をお確かに!」

「ロイヤルのふざけた格好め!!! やり口が汚いぞ!!!」 「やはりロイヤルとは敵対関係なのかしらね。準備よ! フォイヤー!」 「指揮官の秘書艦はこのエンタープライズと決まっている! 終わりだ!」

「……!! 指揮官、危ない!」

銀髪の方達を筆頭に戦火の口火が切られる。火のついた艦載機や武器が飛ぶ。

「はいー…誇らしきご主人様ー!」

とびつきりのニコニコ笑顔で水素水サーバーの蓋を開けるメイド。大量の水素が充満した中、飛んでくる火の艦載機たち、何も起きない訳がなく……。

着任一日目で火事が起きるなんて思わないじゃん？ それが起こるのがウチの母港なのです。あんな至近距離の火災で死を覚悟したので、走馬灯が見えるかと思った。

「ふう……火傷は無いか。安心したよ」

見えたのは安堵した中性的な顔立ちの女性でした。僕はその女性にお姫様抱っこされている。

「あ、ありがとう……あつ」

ようやく状況が掴めたので助けてもらったお礼を言う事ができた。そして彼女の羽織っている長いマントが若干焦げているのが分かった。

「いえいえ、指揮官【くん】が無事なのが何よりだよ！ ……ん？ おや、マントが焦げちゃったか。素早く逃げたつもりだったんだけどなあ」

彼女の言う通り、マントが焦げているのを見つけて申し訳ない気持ちの声が出た。

「そんな顔しないで！ ぼくは指揮官くんを助けたかったからやっただけ。むしろもつと頼って良いんだよ！」

「……ねえ、指揮官くん。これは一つ借りを作った事にならないかい？」

彼女は続け様に言う。

「そうだね」

「それならさ——」

ぼくを秘書艦にしてもらえないかな？

「

最初は驚いたけど、彼女はしっかりとしていそうな雰囲気があり、助けて貰った恩もあるし断る理由もなかった。

「うん、宜しくお願いします」

「こちらこそよろしくね！ あ、自己紹介がまだだったね。」

ぼくはシュフラン級のフォツシュという者だ。しばらくはぼくが面倒を見てあげよう！」

「フォツシュさん、早速で申し訳ないんだけどさ……」

「うん？ なんだい？」

「全焼した講堂の始末書の書き方を教えてくれる？」

「もちろんさ！ でも、ぼくが書いても構わないんだけど？」

「筆跡でバレちゃうよ!?!」

「ははは、冗談だつて。まずは疲れているだろうから、『ぼく』とお風呂に入ろう!」

「そうだね……うん?」

確かに疲れたのでお風呂に————フオツシユさんと入るの!?!

「ちよ、それはマズイつて!! ————ああ! フオツシユさんも普通に服を脱ごうと、脱がせようとしないで!?!」
「まあまあ遠慮しないで!」アツ——!!!

どうやらこの母港は頭のネジが吹っ飛んでる子しかいないらしい。
by 指揮官

母港での隠し撮り対象@指揮官

「おはよう、指揮官くん！ 寝癖も可愛いけど、これから代表会議があるからぼくが整えてあげよう！」

ぼんやりした眠気眼をこすり、目覚ましにしては豪華なフルボイスの方を向く。アツシユグレイをベースにパープルなどのカラフルなメツシユが入った髪の主はフォツシユさんだ。母港着任の日のハプニングから救ってくれたKAN—SEN。とてもお世話好きというのが近い表現だろう。秘書艦ってホテルのルームサービスみたいな事までやるの?? それはそれとして……。

「僕、鍵をかけた筈なんだけど……」

「え、そうなのかい？ 鍵掛かってなかったよ？」

まさかの自分のミスでした。いきなり疑うなんて申し訳ない。あれ、でも昨日鍵掛けたような……確か鉄血の代表さんから『鍵は掛けとけ』と念を押されたのでしっっかり掛けた気が———そういえば夜に物音がしたから一度部屋を出たんだっけ。その時に再び掛け忘れたか。

「別に掛かっててもぼくは問題ないけどね♪」

起きたたての鈍い頭で昨日の出来事をぼんやり思い出して、探偵並みの推理を働かせている間にフォツシユさんが何かを言っていた。

「ん？ どうかした？」

「ううん、指揮官くんはどんなに見ても飽きないなって」

「そ、そんなことはっ」

フォツシユさんのまるで恋人のようなセリフに僕は顔が熱くなるのが分かった。恋人みてーなセリフだろ？ でも恋人同士じゃないんだぜ？ 『フォツシユさんの方が可愛いよ』なんてモテ男のような気の利いたセリフは喉元で止まってしまおう。その代わりにお互い見つめ合ってしまう。

「指揮官くん……」

「フォツシユさん……？」

フォツシユさんの瞳がとろんとしながら、僕の方へと近付いてく

る。えっ、まさかつ、ケツコンしちやうの!? おじいちゃん、おばあちゃん、徳を積むとはこういう—— 【(「ドンツ!!!」)!!】

「!?」
フォツシユさんの手が僕の肩に触れた瞬間に、ドアと左右の壁、天井と四方向からド突くようなデカい音が立てられる。今度は何だ!? また爆発!?

「ね、寝癖も整ったし朝食を食べに行こうよ?」

「そ、そうだね」

フォツシユさんに手を引かれて目的の場所に向かう。その際にフォツシユさんの表情が険しく見えたのは気のせいだろうか。

「母港の食堂ってこんなに広いんだ」

その広さは、会社のお偉いさん達が会食するような何十人も入れるくらいだろう。フォツシユさん曰く、同じくらいの規模の食堂が複数あるらしい。

「じゃあ入ろうつと」

食べるメニューが決まったので食堂に足を踏み入れると、

「「「「……………」」」」」

それまで賑やかだった食堂は箸の音さえも消え去った。何が起き

たの!? サバの味噌煮を食べようとしたのはNGだったのかな!?

「指揮官くん? どうしたの? 席はここだよー」

ニコニコとブンブンと手を振るフォツシユさんに周囲からの冷たい視線が刺さりまくる。ここの母港ってこんな険悪だったの!?

「ねえ、朝から雰囲気な穏やかじゃないんだけど……」

「指揮官くん落ち着いて。雰囲気と穏やかか逆さまだよ? ふふっ」

「おはようございます、指揮官様あく……と【秘書艦】フォツシユ」

ゆらゆらと狐の耳と尻尾を揺らしながら来る、茶色と白い髪の女性が二人、僕に挨拶をしてくれたのは茶色の髪の方だ。

やたら秘書艦の部分を強調している。みんな、そんなに秘書艦やりたいのか。いくらか金額は分からないけど、秘書艦手当出るみたいだし当然かな?

冷たい視線の一人はこの人だったか。そんな片割れの様子に白い髪の方は頭を抱えている。

「おはようございます」

「今日も素敵……すぐにも赤城のモノにしたいわあ……うふふ……!」

「興奮は抑えてください、姉様」

高揚気味の女性を白い髪の人が宥め、一歩前に出た。

「私は重桜の空母、加賀だ。こちらの病み「加賀ア?」……お前に挨拶した方は赤城。同じく重桜の空母だ」

魔物のような邪気を放つのが赤城さん、苦労人になりそうなのは加賀さんということか。

「おはよう。赤城、加賀。今日は何食べたの?」

フォツシユさんは二人に聞いた。

「私は【指揮官様と同じ】サバの味噌煮よ。指揮官様と同じ物を食べていると思うと胸が熱くなりますわあ〜!」

赤城さんはフォツシユさんを睨み、僕と同じ物を食べているところに重きを置く。

「それって胃もた——モゴツ!」

「それ以上言うとお前も死ぬぞ。ただえさえ姉様は朝から機嫌が悪い

——お前達のせいだな」

赤城さんにとってNGワードだったのか、加賀さんに口を塞がれる。機嫌が悪いのはともかく、僕らのせいだ？ どういう事だろう。

「そうなの？ ぼくは調子が良いよ！ 指揮官くんの寝顔を1時間も見れたし！」

確かにフォッシュさんは調子が良さそうだ。なんだかキラキラしてるし……って1時間も!?

「ごんの小娘え……!! 指揮官様の寝顔を拝めるなんて世界遺産なのに!!」

赤城さんの歯軋りが食堂中に広まり、ますます穏やかとは遠ざかっていく。

「世界遺産!？」

「何かしていると思っただらそういう事だったのね……!! おまけにイ雰囲気にまで持ち込むなんて!!」

今朝の部屋のことをバレてる!? ひよつとして僕の部屋の壁って薄いのかな？

「姉様、それ以上は」

「——！ 過剰な接近は慎みなさい。秘書艦だからといって指揮官様を困らせてはいけないわよ」

「そういうことだ。寝首を刈られたくなければ気をつけろ」

起きたら横に首が落ちてるのは怖すぎる！ ここの母港、修羅すぎるよ!?

「ちなみに私の朝食は——」

加賀さんは首だけこちらを向く。

「サバの蒲焼きだ」

「んー、今日は調子が良いなあ！ 指揮官くん、ぼくに何でも頼ってよ！」

朝食を終えた僕たちは、陣営代表会議に出るために会議室に向かう。

「秘書艦になると調子が良くなるの？」

「そうだね、指揮官くんのそばにいられるからね！」

むぎゅーっと抱きしめられるが、フォツシユさんは辺りをキョロキョロしている。まるで索敵をしているかのような目つきだ。

「どうしたの？」

「ここら辺には無いのか……ううん、なんでもないよ！」

僕は違和感を抱きつつ会議室へと入っていった。

「みんな揃ったわね？ 朝礼会議を始めるわよ」

ロイヤル陣営のウエルズさんの音頭で始まった。

「早速だけど指揮官、私の言った通り昨日はちゃんと鍵を閉めたか？」

「ん？ もちろん、指差し確認で掛けたのも確かめたよ」

鉄血代表——ビスマルクさんによって、取り上げられた要件は僕の自室の施錠確認だった。僕に母港の事についてかと思っただけ、僕の予想は外れた。何故僕の自室の事？

「……その後は部屋から出た？」

「うん、部屋の外で物音がしたから確認しに。でも部屋に戻るまでほんの10秒くらいだよ」

「「その間に誰かが……」」」

「えっ、僕の知らない間に何が起きたの!？」

リシユリユーさんやウエールズさん、天城さん、ヴェイツトリオさんまでもが深刻な顔で思慮している。まさか叛逆!？」

「ご主人様、落ち着いて聞きなさい」

メイド隊の教育係——グロスターさんと言う。絶対落ち着けない話だよ、これ……。

「ご主人様は、盗撮されています」

僕は驚きの声を隠せなかった。

「着任二日目でそんな事ある!？」 僕の盗撮にメリットなんてあるの!？」

「指揮官、貴方は自分を過小評価しすぎだ。私達は指揮官を拝むだけで英気を養える」

「英気を!？ 燃料じゃないの!？」

軽くパニックになりかけた僕に更に拍車をかけたのは、ユニオン代表——エンタープライズさんだ。

「九割は同意しますが、このままでは指揮官の生活に支障が出ます」
「指揮官の指揮が執れないのは、我々KAN—SENには致命傷だ。」

指揮官と会えないのは瀕死になるが」

「重桜もアイリスとロイヤルの意見に乗ります。指揮官様と添い遂げるまでは死にきれません」

「皆で盗撮カメラを探し出しましょう。指揮官さまのためならば、何でもできますわ」

こうしてカメラ探しが始まった。半分くらい欲望が出てますよ？

「あまり大事にしたくはないから、なるべく少数で行くぞ」

「分かったよ、ビスマルクさん」

彼女曰く、あまり数が多いと犯人に怪しまれやすくなるので、少数で捜索することになった。秘密保持性が高いと言われているKAN—SENが派遣され、探索メンバーはアルジェリーさん、ビスマルクさん、チャパエフさん、神通さん、秘書艦のフォツシユさんだ。

「指揮官と初仕事がカメラの捜索なんてねえ……」

「そんなに怯えなくても良いわよ、指揮官」

チャパエフさんは「ぽすつ」っと軽く僕の背を押す。指揮官の僕が怯えていては格好が付かないな。

「カメラ如きで指揮官の能力が測れるとは思わない事ですね」

神通さんの扇子はどこか分からないカメラに向けられている。

「指揮官くん、ぼく達はこの辺で立ってたよね？」

フォツシユさんの指差した先は、僕のベッド付近だ。

「ちよつと待て。何故、貴方が指揮官の部屋にいた？」

「早朝に指揮官くんを起こしにね。鍵は掛かってなかったよ」

「早速、容疑者が出たわね」

「一番怪しいけど、早計でないかしら？ アルジェリー」

「どういうこと？」

「フォツシユは何時頃、指揮官の部屋へ？」

「朝4時くらいだよ、神通」

「フォツシユさん、朝4時からいたの!？」

「うん。指揮官くんの寝顔は何時間見ても癒されるからね」

さも当然のように言うけど、もしかしてその間にずっと寝顔を見られてたって……コト!? 恥ずかしいよか怖いよ!？」

「ふうくん……ならば指揮官。ちよつと来て」

アルジェリーさんに手招きをされて近寄ると、肩を掴まれて、

「はい、盗撮魔さんへのプレゼントよ」

彼女の片手には黒いコンセントのような物があり、それに向かって僕はツーショットのように密着した。

「指揮官、次はこつちよ」

「指揮官、私に抱きついてくれますか?」

「あなた達、やり放題だな……」

続け様にチャパエフさん、神通さんに似たような事を要求された。その反面、ビスマルクさんは呆れていた。

「ざつとこのくらいかな?」

「ええ……」

みんなが見つけてくれた物をフォツシユさんが一箇所に集めてくれた。何か10個以上あるように見えるんだけど。あの数秒でこんなに設置できるもんなの!？」

「これだけ設置できるとなると、指揮官の部屋に詳しい者か【そつち】の道に詳しい者だな」

「そつち?」

【蛇の道は蛇】と言う事さ、指揮官くん」

ビスマルクさんの考察にいまいちピンと来ないでいると、フォツシユさんが解説を入れてくれた。その道に詳しい人に聞くということか……ん?」

「でもそれって「先手必勝。早速、行きましょう」「そうね」——

あ、うん」

神通さんの鶴の一声で他の子達も動く。みんなどこに行くのか分かってる感じだけど、僕はただそれに付いていくしかできなかった

た。

「この軍団は何かによ？」

「ねえ【これ】、貴方は見覚え無い？」

ビスマルクさんは、回収した盗撮カメラを明石さんの前に置く。明石さんは工作艦だから疑われはしやすいだろうけども……。

「ちよつと見してにや……これ、明石のじゃないにや」

「なに？」

「明石はそもそも、こんな安っぽい素材で作らないのにや」

「……」

アルジェリーさん、チャパエフさん、神通さんは警戒を解かない【ように見える】。

「確かに素人にしてはよく出来てるけど、市販の素材だけじゃステルス製が薄いにや。明石が作るなら、もつと小型で——見つかったもバレない物を作るにや」

ダイヤは取るけどにや、と警戒を解かない3人にお金の目を光らせる。

「確かにあつさりが見つかったよね。まあ設置した子が素人なのもあるかもしれないけどね」

フォッシュユさんの意見に僕も同意した。盗撮カメラというくらいだから、カモフラしてたりして見つけにくいと思ってたけど、案外すぐに見つかった。

「……今回の件、明石は無関係で？」

「そうにや。明石はこんなちやつちいモノ作らないにや！」

明石さんは、ふんす！ と胸を張る。

「……そうか。疑うような真似して悪かった」

「しよがないにや」100ダイヤ払えば許してやるにや——指揮官が」

「僕!? まあ良いけどさ」

「どうせ物事を中心は指揮官だにや? ここの母港は指揮官大好きだからにや〜」

「」「まあ、そうね……」「」

皆んなして目をそらすので、なんだか照れ臭い。

「ダイヤをくれたお札にいい情報をサービスするにや」

「いい情報?」

「昨日の購買部ではデジカメ、集音器、ピッキング材料の売上が過去1で最高だったにや!」

「ふくん………は?」

購買部に何売ってんの!?

「購買部は実質、無法地帯だと聞いていたけど………こんななのね」

ビスマルクさんは感心しているのか、呆れているのかどちらとも取れる反応だった。呆れてて欲しい。

「流石に誰でも買えるって訳じゃ——」

「買えるわよ」

「一人一点までよ」

「あるいは物々交換です」

「3人とも何でそんなに詳しいの!」

まさか買ってたりする? 前者二つは問題ないけど、最後のはちよつとなあ……開かずの金庫でも開けるのかな? (目逸らし)

「ぼくも買いたかったなあ」

「フォツシユさん!？」

「鉄血の技術で作れるだろうか……」

「鉄血の技術が無駄遣いしないで!？」

「二」「無駄なんかじゃない!」「三」

「あれ!？ 僕が悪いの!？」

「悪いからツーショット一枚撮らせて!」

「贅沢言わないから産まれたままの状態も撮らせて貰えるかしら?」

「どっちが悪いのか分からなくなってきたよ!？」

「みなさん、一つ私から提案があります」

アルジェリーさんとチャパエフさんの悪ノりに付き合った後、ひと息ついた神通さんが提案した。

「あくまでも可能性なのですが、盗撮カメラの販売元が分かれば、犯人が分かる材料になるのではないでしょうか」

「確かに……でも販売元なんてすんなりと分かるかなあ——」

「闇市ね」「ああ、確かに闇市ならありそうね」「あそこは何でもありませんからね」「闇市か……私も一度指揮官の——」

「じゃあ闇市に行こうよ、指揮官くん!」

「え?…え?…」

僕以外の人間は目星が付いているらしく、フォツシユさんに手を引かれて連れて行かれる。話が置いてけぼりだから一緒に連れてって欲しいんだけど……ビスマルクさんは僕のナニを買ったの!？ 僕の私物、何も何も取られてないよね!？ ……ないよね?」

「いらつしやいませ……」

「ここが闇市か……」

闇市と呼ばれるお店は、名前に反して日の当たる——演習場の建物の横にあった。ぱつと見じゃ分からない点は闇市だけど、普通に分かりやすいところにあった。

「店員さんは不知火さんがやってるんだね……」

「指揮官が装備箱を買ってくれないので、経営が苦しいのです……」

「完全に闇堕ちしてるね……」

「今度何か買わないと……でも割高すぎてね……」。

「ねえ、盗撮カメラ買ってここで売ってる？」

「アルジェリーさん直球すぎない!？」

「全部売り切れました」

「誰が買った？」

「いくらビスマルクさんでも、そこはプライバシーなので……」

「そこにプライバシーはあるの!？」

「「「ありまあす!」」」

「それちよつとマズイヤツだよ!？」

「ここですら分からないともなるとどうしたものか……アレをするしかなさそうだ。」

「しよがない、皆んな手伝ってくれてありがとね」

「指揮官？」

「今から母港全員で持ち物検査をするよ」

「みんな、急に講堂に集めて申し訳ない」

ざわざわ、と集められたKAN—SENの子達は戸惑いをあらわしている。

「今から持ち物検査をします——」

「え!? なんで!?!」「うそー!?!」「丸裸にされちゃう!」「アドーニスなら構わないわ!」「指揮官さまの歯ブラシはセーフかしら!?!」

これ全員ざわめいているな。ちよくちよく不憫な単語が聞こえたり、僕の私物が聞こえたりしたけど気のせいだよな!?!

「えつとね、僕の部屋に盗撮カメラが仕掛けられたんだ」

「「「「あつ（察し）」」」」

「え?」

あれだけ騒がしかった講堂が一気に静かになる。あつ、て何!?! これもしや……。

「みんな……——」

「盗撮カメラ没収!」

盗撮、ダメ絶対。

☆KAN—SENサイド

「ちよつと！ 隠しカメラに気づかせる小娘はどいつよ!？」

「大鳳は抜きありませんわ。赤城さんではなくて?」

「私メイド長がそのようなミスは致しません」

「ご主人様自身は気づいていません。勘づかれたのは陣営の代表方です」

「中々厄介ね。オサナナジミとハグしただけなのに剥がされちゃったわ」

「それは残当では?」

「貴方たち、昨日の夜ちゃんとピッキングしたかしら?」

「ええ。私たち3人で外で物音を立てて、その間に設置部隊が入る作戦でしょ?」

「まさかその後、隠しカメラの搜索に駆り出されるなんて思わなかったけど」

「指揮官が陽動から帰った後に鍵を掛けなかったのも、想定外の事態でしたね」

「あの秘書艦は中々鋭い感してるわね」

「陣営代表が味方につくと厄介ね。何とかして【こちら側】に引き込まないかしら?」

「闇市利用してる時点でもうこちら側ですよ」

「まあ本当のブツは、あの店から地下に潜らないと買えないんだけどね」

「カメラは取り除かれちゃったけど、指揮官の動画が貰えたからいいわ! クッキー食べながら観ましょ♡」

「指揮官様とツーショットしてるのはアレですが、まあ陽動作戦の報

酬として差し上げますわ」

「そんなことしなくても……」

「どうしたウエールズ」

「普通に指揮官と写真を撮ってもらえばいいじゃないか」

「」「私たちにそれが出来ると思うかしら?」「」

この母港のKAN—SENは隠密に積極的な割に恋愛クソ雑魚だった事を忘れていたウエールズであった。

☆KAN—SENサイド 終

隠しカメラ騒動から翌日。あれから監視されている感覚は無くなった【ように思える】。隠しカメラ全部取り除いたビスマルクさんも気配は無くなった、と言っていたしね。

「指揮官くん、おはよう！ 今日もおぼくに頼って良いんだよ！」

今日も明るくフォッシュュさんの挨拶を受ける。午前5時に。果たしても僕は寝顔を凝視されていたのだろうか。

「指揮官くん、着替えさせてあげるね！」

「え!?! いや、いいよ!?!」

さすがに恥ずかしいから全力で拒否した。それなのにも関わらずフォッシュュさんは僕のワイシャツのボタンを留めてくる。

「よし！ ボタン留め終わり—— あっ……」

ふと顔を上げると目が合ってしまった、お互いの息が顔に掛かるほど

近づいて……

「指揮官くん……」

「ふお、フォツシユさん……?」

「指揮官くんなら」「ドンドンドン!!!」——「うわあっ!」

艶かしい表情のフォツシユさんが僕の手を取って、彼女の唇との距離が無くなる直前——四方の壁と床、天井の全方位から壁ドンを喰らい、二人ともびっくりしてしまった。あれ? そんなにうるさかったかな……?

「ふふっ……」

「どうしたのフォツシユさん?」

「さっきの指揮官くんの声が可愛くて、ね?」

「そ、それならフォツシユさんだって同じようにびっくりしてたじゃないか!」

あんな間抜けな声を改めて言われると恥ずかしい思いに巻かれる。

「ふふ、それなら一緒だね。指揮官くんっ♡」

「ふあっ?! ……ん?」

フォツシユさんにギュッと抱きしめられて再び驚くも、【あること】に気づいた。

「どうしたの——あらら……?」

二人が気づいた事——それは僕の部屋のドアが開いていた事。そして、その隙間から幾つもの瞳がこちらを覗いていた事。瞳の数24で足りるかなあ……。

「指揮官さまあ? 赤城ともイチャイチャして下さりますよねえ……?」「この大鳳がその先もお相手差し上げますわあ〜ふふふ!!!」「お姉さんイベントよりもボーイツシユ娘との攻略なんてお仕置きしちゃうわよ!」「メイドとのイベントがお待ちですよ、ご主人様」「私もよろしく頼む」

これBAD ENDでは？

「指揮官くんの可愛い声、撮れちゃった☒」

『フォツシユさん……』『うわあっ！』

「闇市は何でも売ってて助かった。もっとお世話したら、もっと良い声が聴けるかな？ うふふ……」

フォツシユの枕元には指揮官ボイス用のレコーダーがある事は誰も知る由は無い。

例の対策@一筋縄にいかない（前編）

「あああああ、忘れてたあああああ!!!」

「——!? 指揮官、何があつたのですか!？」

「ああ……リシユリユさん、急に大声出してごめん。実は……」

それは遡る事、数時間前——

「あの資料どこにあつたかなあ〜」

着任してから運営本部に提出しなければいけない資料があり、僕はそれを探していた。

「指揮官くん、こっちにも無いよ〜」

「そっかあ」

秘書艦のフォツシユさんと手分けして、執務室内の引き出しを開け閉めしているが、目ぼしい資料が見当たらない。

「メールには資料が添付されているんだよね？ それを印刷した方が良いんじゃないかな?」

確かにその通りではある。

業務用メールアドレスには、欲しい資料が添付されているので焦る事は無い。だけど、それでも探す理由がある。それは、母港に着任する前に上司から口頭で「何か」を聞いたのだけど、着任初日であまりにもインパクトが強すぎて、ほとんど記憶から吹っ飛んでしまった。まあ、『資料は送ったから』と言われたので、そこに詳細は書いてあるのだろう。送られてきたメールをもう一度見直してみよう。

・母港着任について

・着任おめでとうございます。指揮官様。この赤城が……

・【超重要】KAN—SENとの接し方について

・大鳳と申します。この度は誠に着任おめでとうございます。不束

者ですが……

・【添付】始末書申請書

・近年、〇〇ウイルスに対する対策取り組みについて

うーむ、メールはこれだけなのに何を伝えられたか結びつかない。赤城さんと大鳳さんのは間違いメールかな？ 着任日に届くわけないしね。まだ業務用メールアドレス教えてないし。

「そこまで重要なものだったら、母港宛の郵便ポストに届いてるんじゃないかな？」

「あつ、そっか！」

てつきりメールのみで済むような事ばかりだったから、そこをうっかりしてた。

「ぼくが取りに行こうか？」

「うーん、母港内を見回りついでに僕が行くよ」

「そっか。母港の構造も知っておいた方が良くもんね」

「うん。でも、ありがとうね」

「——はい」

「ん？」

フォツシユさんが手を広げて待っている。その意思表示の意味が分からず、僕は首を傾げる。

「この母港には危険が多いから、気をつけてね」

「ふあつ……」

意図が伝わってなかったからか、次はフォツシユさんがこちらに歩いてきて、僕をしつかり抱きしめて耳元で囁いた。

そんな母港が無法地帯みたいじゃないか、ははは。

「あつ！ 指揮官〜！」

「ん？ おお、ハウさん。こんにちは」

母港の見回りを兼ねて、郵便ポストまでの道のりを遠回りしていると、後ろから声がかかった。

彼女はハウ。キングジョージ5世さんや、ウエールズさんの妹だ。ウエールズさん曰く、『彼女は私たち姉妹の中でも、クセが少なくて接しやすいと思う』らしい。まだ他の姉妹に会えていないので比べ難いところはあるけど、モナークさんはセーフなのだろうか……二つの意味で。

「あら、私の事を知ってるの？ 嬉しいわ！」

「名前だけはウエールズさんから教えて貰ったんだ」

「……後でウエールズには『指揮官の靴下』を渡しておくわ」

「え？」

「それなら話は早いわ。私とのお近づきの印に、クッキー焼いてきたの！ 指揮官も味見してくれる？」

アイシャドウがくつきりと見えるくらい目を細める彼女は、小さなバスケットの中に美味しそうな香りが漂うクッキーを差し出す。

「良いの？ それじゃあ——うまいっ！」

お世辞抜きに、本当に美味しい。来賓用に出す高級な物と同等——それ以上に美味しく感じた。

「ふふ、そんなに美味しかった？ じゃあ指揮官、私に食べさせて」

バスケットの中にある、適当に白いクッキーを摘んで、彼女の口に入れた。無邪気に口を開けるハウさんは、まるで子供ひな鳥のようで可愛い。

「んふふ。指揮官から食べさせて貰ったクッキーはもつと美味しいわ！ またね、指揮官！」

幸せそうにクッキーをハムハムした彼女と小さく手を振って分かれた。

「ねえジョージ、ヨーク！」

「おや、良い事でもあったか。ハウ」

「そうよ、ジョージ！ 指揮官に「クチに挿れて貰ったの！」

「ふうん……え？」

「【白いモノは濃厚だったわ！】」

「ま、まさかアドーニスにか!?!」

「そうよ！ さつき、そこで」

「こんな人通りの多い所で大胆な……!」

「指揮官は中々、豪胆なものだな」

――

「へえ……母港に掲示板なんてあるのか」

母港内を散歩していると、母港内のニュースが電光掲示板、コルクボードに貼られている。「アクセスURLはこちら ↓ アズレンちゃんねる・a z r n」

へえ、時間があれば覗いてみようかな。

「あら、指揮官くん☒」 「……ここで何してるのよ、あなたは」

掲示板をぼんやりと眺めていると、二つの似ている声が耳に入った。僕は声のした方にくるりと振り返る。

「私はセントルイス。指揮官くんに会えてラッキーだわ♪」

「……ホノルル。こんな所で油売ってて良いの？」

青と赤の対照的なヘアカラーと性格の二人のようだ。ホノルルさんはため息をついている。まあ、サボっているように見えなくもないな。

「指揮官くん。ホノルルはああ言ってるけど、『声を掛けてみよう』っ

て先に言ったのはホノルルの方なのよ」

「——!! ちよつと?」

セントルイスさんが耳打ち(周りにも聞こえるくらい大きさ)で教えてくれた。ホノルルさんの表情は髪色と遜色ない色をしている。

「……ほら、講堂で爆発があつたでしょ。あなたよく生きてたわね……」

「流石にあれば三途の川が見えたよ。無料で観れるなんてお得だよね！」

「……はあ、当日券で良かったわね」

「むう〜! 私も指揮官くと観たい!」

セントルイスさんは無邪気にも僕を後ろから抱きしめる。なんでこの母港はスキンシップが激しいKAN—SENが多いんですかね!?

「……ルイス、行くわよ。もう良いでしょ?」

「いいえ、まだよ」

「ホノルルはああだけど、心配してて不安だったみたい。だから、指揮官くんから抱きしめてあげてくれる?」

抱きついている彼女は、今度は本当の意味の耳打ちをした。あの爆発を見たら、誰だつて死んだつて思うよね。それは心配するわ。

「ホノルルさん」

「……なに——つ!」

「心配してくれてありがとうね」

ホノルルさんをゆっくりと抱きしめた。最初は強張っていたが、次第に柔らかくなつていった。ホノルルさんの体温つて結構高いんだなあ。温かい、暑い、ちよつと熱い——熱い!」

「アツツ!? ホノルルさん、湯気出てるけど大丈夫!」

まるで壊れたファンヒーターのように、高熱で目をグルグル回す彼女に狼狽える。

「ホノルルのキャパオーバーかしら？ 私はこの子を連れてくから。またね、指揮官くん☒」

ファイアーマンズキャリアのようにKAN—SENファンヒーターを軽々と担ぐセントルイスさんは、ひらひらと手を振って去って行った。KAN—SENのパワーは男性格闘家も軽々と凌駕すると言われるから、そう言われると何もおかしい事は無いのだけど。

「おかえり。セントルイス姉さん、ぐったりしてるホノルル姉さん。何か良い事あったの？」

「聞いてよ、ヘレナ！ 指揮官くんって温かいのね」

「……何よ、あれ。腰が抜けたわ……」

「えっ」

「私も指揮官くんから抱きしめて「ヤツて貰いたいな」」

「もう汗かいたちやっただじやない……お風呂入ろ……」

「私も行こうかしら。ヘレナも行かない？」

「私は良いわ……」

「そう。またね」

「……まさか三人でやったの!? こんな白昼堂々と!？」

郵便ポストのあるところまで歩いてきた僕。そこで働いているのは、見た目がヒョコっぽい【饅頭】と呼ばれる動物？ がセカセカと

手紙や配達物を運んでいた。

「こんにちは、指揮官」

「リシユリユーさん」

受付を済ませて近くの待合席で待っていると、リシユリユーさんと会った。KAN—SENの人達って本当美人が多いなあ。その中でもリシユリユーさんは一段と美人だと思う。

「指揮官も郵便物を受け取りに来たの？」

「うん、探してる資料が届いてるかもってね」

「そうだったんですね。私も指揮官の郵便物を受け取ろうとした所です」

「僕の？」

「講堂の爆発で焼けてしまった資料がいくつかあったので、再申請しておいたので受け取ろうと」

「焼けてたの!? ありがとうございます!」

リシユリユーさんの手配の早さに、心から感謝していた所に饅頭から郵便物を受け取った。

「えーっと、そこそろ貰ったなあ」

「私にも見せて下さる？」

隣に座るリシユリユーさんが、さらに近づこうと僕の手のひらに、すらっと綺麗な手を載せてくる。美人なりシユリユーにやられるとドキツとするから心臓に悪い。

【〇〇母港について】、【KAN—SENの接し方について】、などなど
パラパラと資料を流し読みしていると——
!!!!

「これは【〇〇ウイルスの予防対策取り組み】ですね——指揮官?」

やばい……記憶が蘇ってくる……上司の言葉だ——『予防対策のためにKAN—SENとの接触はやめとけよー。あと黙食なー。近いうちに予防対策委員会が巡回してくるから、ちゃんと対策しとけよー』

僕の冷や汗と絶叫が木霊した。

「指揮官。慌てるのは理解できませんが、他に理由があるのです?」

「対策委員会の人ってね……ペナルティがすごいエグいんだよ……」

それから僕は立て続けに説明した。

これは僕が、別の母港で指揮官の補佐をしていた時の話なんだけど、とある母港でわずかにペナルティを食らった時があっただけなど、減点対象として【ヤンデレ測定器】なるものを渡されたみたい。その測定器を使った直後、KAN—SEN達は黙食、接触距離を置いて一件落着のように見えた。その代わりの代償として、KAN—SENからは凄く重い愛情を向けられるようになり——うっ！
これ以上思い出すと頭が痛い!!

あの指揮官さん、僕と同じ年らしいから上司でもあり友人でもあった。惜しい人を亡くしたか……普通に生きてるんだけどね。腎虚になっってないと良いなあ。会うたびに痩せこけてた気がする。

「ココもあまり変わりないような気もしますが、早速取り組みをしましょう。仮に明日来ても大丈夫なように」

「変わりないってどういう事!? 愛の深い子って一部じゃないの!?
リシュリユーサーーん!?!」

僕の嘆きは虚しく郵便受付内に跳ね返る。それはともかく予防取り組みをしないと!

「今回は少人数で動くって事だね。指揮官くん」

「うん。よろしくね二人とも」

「チョー楽しそうな仕事じゃん、プリンちゃん！ えっと、何すんの？」

感染対策という事で、マスクを取りに来てもらうと密集する可能性があるのですが、僕たち少人数でマスクの箱をKAN—SENの子達に配る予定だ。そこでフォッシュユさんと、リシユリユさんは仕事があるので、代打としてたまたま手が空いていたサンフランシスコさんに協力してもらった。

「KAN—SENのみんなにマスクをプレゼントしに行くんだ」

「プリンちゃん、それだとウイルスまでプレゼントしない？」

「もちろん僕らもマスクしてから配るよ——最初はあの陣営に行こう」

「ふむ、御足労頂いたな、同志たちよ。例の感染対策だな？」

僕たち一向はソビエツカヤ・ロシアさんをはじめとした、北方連合陣営に来た。まあ、ここを最初にしたのは理由があつて……。

「皆待ち焦がれているから、速やかに来てくれ」

作業中だったのか、割とラフな格好のロシアさんに案内される。入り口や服辺りから漂う【あの】匂い……。

「皆さん、おかえりなさい。ボルシチでもどうですか？」

「やあアヴローラさん」

「ここがホクレンかく。テンションMAX！ はははは！」

「新鮮だね！今度はここでご飯食べてみようよ。指揮官くん」

「ああ、我ら北方連合の食事は美味しいぞ！ ただ、同志指揮官を独り占めは見逃せまい！」

「今度お邪魔させてもらうね、キーロフさん」

さて、ホクレンの子たちが集まっているロビーには、

・王様ゲームか何かで、ウオツカを口移しするタシユケントさんとメルクーリヤさん。

・アヴローラさんの飲むウオツカの溢れたものを口で受け取るタリンさんとチャパエフさん。

・ビール瓶を片手に大声で談笑し、ビールで手を洗い出すガングートさんとキーロフさん、ベラルーシアさん。

「指揮官くん、これは？」

彼女たちを指差すフォツシユさん。流石に苦笑いを隠せない。

「スリーアウト☆」

まあ想像通りだったね。最初に来ておいて正解だったよ。

「バンデエエエジロオオオオオオオオオオ!!! もう一回!!!」

「うわ!? ユニオンが何用だ!」

「我ら北方連合に歯向かうつもりね!」

「サンフランシスコさん! ウオツカ程度で倒れない彼女たちをバツトで殴っても記憶は飛ばないよ!」

「同志指揮官よ、頭のネジはどこに行った!」

「僕はまともだよ、ロシアさん! フォツシユさん、ここにいる皆んなに水を飲ませてあげて!」

「指揮官くん、ここの蛇口、ビールの味がするよ!」

「なんだって!」

「同志指揮官もホクレンの家族にならないか? 我となら最高の愛が育めるとおもうんだが?」

「最高のセリフだよ、ガングートさん。でも、ウオツカを口移ししないで!!」——あつ、ソユーズさん」

「何を言ってるんだ同志よ。幻覚でも見えているの————あつ」

「指揮官、私とこれからサウナに行かないか？ 多少の裸の付き合いも必要あるだろう?」

「ロシア、ソユーズを目の前によくそんな事を言えるわねえ……ねえ指揮官、胸が大きくて凝ってるから揉んでえ〜♡ あつ、ドーテーの指揮官には出来ないかなあー?♡」

「そ、ソユーズさん? あの〜……」

ソユーズさんの色白で綺麗な顔に、格闘漫画で見るような血管がブチブチ湧き出ている。僕は恐る恐るソユーズさんに声をかける。

「指揮官、手荒な真似はしませんよ。サンフランシスコさん、そのバツトを貸して下さいさる?」

「え〜?」

「……………」

「ぶ、プリンちゃ〜ん!! アタシが的になっちゃうー!!」

サンフランシスコさんが放り出したバツトをソユーズさんが掴むと、北方連合の皆さんは一斉に正座をし出した。

「指揮官、後は私から伝えておきます。まだマスクを配りに行かなければならないのでしょうか?」

「う、うん。じゃあお願いします……」

「————さて、始めましょうか」

「「「「「Y p a a a a a a a a a a!! (悲痛の叫び)「「「「」

真っ白な北方連合がアカく染まった。

「これから感染対策。濃厚接触、黙食を徹底しましょう。良いですね？」

「「Да, Союз Мама! (はい、ソユーズママ!)」」

「まず、ロシア」

「な、何だ？」

「サウナには水着を着用しなさい」

「流石にサウナに水着は——」

カラカラカラ (バットが引きずられる音)

ダラダラダラ (ロシアから汗が流れる音)

「そ、そうだな。節度は持とう」

「次にメルクーリヤ」

「な、何よお？」

「そんなに胸が凝ってるなら、ロイヤル陣営のフードに揉んで貰いなさい」

「はあ!? あのロリ趣味オバさんに————つて何でこんな所にフードがいるのよ!? 力強っ!? イヤアあああああ!!!」

「最後にガングート」

「わ、我は何もしてないぞ!」

「愛の告白と指揮官と口移し未遂をしておいて?」

「び、ビールのせいでも覚えてないなあ!」

「ならば思い出すまで貴女の頭に聞いてみましょう。このバットで良いかしら」

「ま、待て！ 話せばわかる！」

「それは重桜での殺されるセリフよ。ガングート」

「チャ、チャパエフだって同志とツーショットをしたと聞いたぞ！

我も欲しい！」

「なっ!? この情報網ガバガバじゃない！」

「それは後で聞くとして。ガングート——貴女だけ隔離するか、マスクで静かに会話&黙食どちらか選びなさい」

「対策すると忠誠に誓おう！ 同志指揮官や仲間には会えないのは嫌だ！」

「それは私ですよ」

「ソユーズ……！」

「ところで指揮官とのツーショット写真、私にも焼き増しして下さいかしら？」

「ソユーズ……」

「二」やはりホクレンは最高だな！」「二」

「ねえ、プリンちゃん。アタシのバット返ってくるかな？」

「返って、はくと思う……」

「血が返ってくるかもよ」

「カラーペイントされて……ってフォツシユー！ プリンちゃん、バット持っていない？」

「何故持ってると思ったの!？」

「指揮官は立派な【バット】をお持ちじゃない？　ねえ、ザラ？」
「しかも【ボール】まで持つてるものね？　ご機嫌よう、指揮官」

北方連合陣営から仕事を終えた(?) 僕たちは、次の陣営に向かっていた所だ。そこで艶かしい声でギリギリを攻めるワードで近づいてくる二人と出会う。

どちらもツインテールヘアで、紫色の髪色の方は装備している剣の端っこを指で艶やかになぞっている。『ザラ』と呼ばれた赤い髪の方は僕らに挨拶をすると僕の目の前まで来た。

「私はザラ。サディア陣営所属の重巡洋艦よ。覚えておいてね？」

「ポーラ。同じくサディアでザラ級の4番艦よ。うふふ……」

「うん、よろしく——っひい!？」

「指揮官の【ボール】はどこにあるのかしら？　ふふふ……」

「可愛い声で鳴くのね、指揮官♡」

ザラさんにサワサワと胸あたりを急に触られて、変な声が出てしまった。僕のボールはそんな所には無いよ!？」

「うん？　サディアって……」

「わお！　プリンちゃんの目的地じゃーん！　ビンゴー!」

そう。僕たちが向かおうとしていたのはサディア陣営だ。特別な理由は無く、北方連合から近かっただけである。

「そうなの？　ならば盛大におもてなしてあげましょ？　ポーラ」

「そうね、色々聞きたいこともあるし、ね？」

ザラ姉妹の絡みが解かれてホッとした。

「ちなみに【バット】は【コンバット】の事で——」

「【ボール】はコレよ」

ザラさんは悪戯な笑みを浮かべながら、僕の胸ポケットにあった【ボールペン】をカチカチと鳴らした。

「指揮官くんの【バットとボール】はぼくが守るから安心してね♪」
フォッシュュさんの言葉の意図を理解できないまま、サディア寮へと

歩いた。

「こんにちは、指揮官さま。例の感染対策、お疲れ様です」

丁寧に出迎えてくれたのはサディア陣営の総旗艦——ヴィットリオ・ヴェネトさんだ。

「急な伝達になったけど、感染対策に来たよ」

「ええ。急ぐ内容ではあるので問題ありませんが——」

「やあ、指揮官！ このリットリオが来たからには見事な対策にしてみせよう！ ははは！」

ヴェネトさんに割り込む、颯爽と現れたのはリットリオさん。緑色の髪が特徴だったので覚えている——母港着任挨拶で【性癖を晒した人】だ！

「それは助かるよ」

「指揮官くん、顔がこわばってるけど……ぼくとお昼寝するかい？」

「プリンちゃん、催眠アへ堕ちNTR性癖のサディア艦にビビってるー？ うはは☆」

「……そんな事ないよー？」

「目が泳いでるわよ、指揮官？」

「おやおや、一人の性癖も受け入れられないようではサディアの栄光を任せられないなあ？ んー？」

「サディアの栄光歪みすぎじゃないかな!？」

リットリオさんに呆気なく壁に突き飛ばされ、顎クイをさせられる。彼女は怒っているようにも取れるし、この状況を楽しんでいるようにも見える。

「そんな指揮官には、たつぷりと教え込まないとなあ？ 私と、濃厚な夜を——ね？」

どうしてこうもKAN—SENの子達は力が強すぎるのか、抜け出そうにも身動きが取れない。ザラとポーラさんはニヤニヤしているのに対して、フォッシュさんの表情がジツトリとしてきている。もし

かして今、湿度高い？

「指揮官さまが困っていますよ、リットリオ。濃厚で思い出したのですが、指揮官さま——」

「他の子達と白昼堂々、爛れた肉体関係を結んだ」という噂は本当なのですか……？」

「へ……？」

ヴェネトさんの一言は、陽気なサディア艦を曇らせるのには充分な言葉だった。フォツシユさんは相変わらずだし、サンフランシスコさんに至ってはゲラゲラ笑ってるし。

「私達も聞きたかったのよ、ソレ」

「指揮官くん、ぼくと一緒にいたくなかった理由って……（これは分からせる必要があるそうだね）」

「そんな事してないよ！ そんなの母港が破滅の始まりじゃないか！」

「実際は手を出さない方が危ないのよね……それは置いておいて。私達も適当言ってる訳じゃないのよ？」

なんか聞き捨てならない事言われた気がするんだけど……ここ
の母港って不満が多いのね。何とかしなければ——例えば、
娯楽施設など置いてみようか？

「火のない所に煙は立たないからな。ロイヤルやユニオンの子達の会話を聞いたんだ——『んむつ、ぶはあ……ひっはいへはね、ひいひいはん♡（いっぱい出たね、指揮官♡）』指揮官から出た濃厚で白いモノを、美味しそうに舌舐めずりしてた』や、『ん”お”っ！あひいっ！』白昼堂々、汗だくになりながら腰が抜けるほど燃料補給

（意味深）した』とな」

リットリオさんはまるで官能小説を読むかのように、僕からすれば火の立っていない煙を嗅がされている。何か聴いたことがある声なんだよなあ……あつ、前の指揮官さんが持ってたギヤルゲーの音読セリフだ！

「指揮官くん……ぼくは上のお世話も下のお世話も出来るよ？」

「掛かり気味じゃない、フォツシユー？ バットで殴られとく？」

「流石ね、リットリオ。ムラムラしてきたわ」

「噂が本当かどうか、試してみましょ？ ねえ指揮官？」

「ちよ、僕が種馬みたいじゃないか！ 大体、人ってそんなに出ないよ！？」

ピンクなムードに塗れたザラ姉妹、リットリオさんが誘惑の目つきでジリジリと迫ってくる。これ新手の詐欺かな？

「ほう？ それは益々楽しみだ——！！ おつと！」

「タネッ！」

「ザキッ！」

「バンデエエエジロオオオオ、デンジャラアアアアス!!!
色ボケパスタにもう一回♪」

「ザラさん、ポーラさん!? それに今の謎の断末魔は何!？」

「バットは好物だよ！ 指揮官、のね？」

「サンフランシスコのバット、血痕とウォッカの臭いがあるんだけど……」

「うえ!?! マジクサー!! プリンちゃんしゃぶつてー!」

「それこそ煙立つちやう発言なんだけど!？」

「何!?! サンフランシスコ、君は両性器具所有者なのか!?! ちよつと見せてくれないか!?!」

「リットリオさん掛かりすぎだよ!?!」

「——それでは、アレはただの噂という事でして？」

「うん、手を出してないよ。ヴェネトさん」

「ふむ、それはざんね——指揮官の立場としては正解だな」

「今、本音漏れなかった？」

「漏れたのは、あいえ——コホン。粘膜の濃厚接触禁止と黙食、黙フェ○チオだったな」

「少しは隠して!? あとは手洗いうがいの消毒だね」

「消毒をすれば接触は可能か？」

「それ本末転倒では？」

「ならばマスクを一つくれるかい？」

リットリオさんにマスク入りの箱を渡し、彼女はマスクを装着すると——。

「——!?!」

「「「は?」」」」

「——んっ。これならセーフだよな、指揮官? ははは! アデオス!」

「噂が本当になっちゃったわね、指揮官♪」

「あーあ、赤くなっちゃってカワイイ♪」

「指揮官さま、どうされ——」「感染対策畏まったわ、指揮官。手洗いうがい徹底ね」「行きましょ、ヴェネト」「用が済んだら行くぞヴェネト。武器なんか捨ててこい!」武器? リットリオ、どういうことですか? あなた顔が赤——ひゃっ!? どこ触ってるんですか!? ポーラも揉まないでください!」

サディアの総旗艦は仲間からのセクハラに揉みくちやにされて連

れて行かれてしまった。本当に総旗艦だよね？

「プリンちゃん？ プリンちゃん？ バットの的になっておくかー

い？ おーい？」

「指揮官くん……」

二人の言葉が耳に入ってこないくらい呆然としていた僕だった。

先ほど接触したマスク越しの唇付近に――。

「ホントにザラって恋愛よわよわね〜」

「よ、よ、よわよわなんかじゃないわよ！ 心臓バクバクで何も一線越えられなかっただけよ！ ポーラだって、余裕1／3の恋愛クソザコムーブしてたわよ！」

「わ、わ、私はクソザコなんかじゃないし？ 指揮官くらい恋愛つよつよですけどー!? 決して好きの感情が3／1になっちゃって指揮官の前だと立っていられる自信がない訳じゃないしあとの2／3はオトナの恋愛感情ですが何かー？」

「……」

「……」

「……不毛な会話はやめましょう。決着が見えないわ」

「そうね……ごめんなさい。さすがキュート界の自称クールよね、ザラは」

「ポーラも、萌えキャラ7兆点、優勝よ。ふふっ」

「まさかリットリオが大きく一步踏み出すのは予想外だったわ」

「そうね。恋愛つよつよムーブなだけかと思っただけど、あんなに肝が据わってるなんてね」

「リットリオ【も】指揮官好きだものね」

「多分、サディアの中で一番好き好きアピールが激しいと思うわ」

「あと一步踏み出せればね……」

「私達も……」

「はあ……」

——

「指揮官くん、ちゃんと消毒した？」

「う、うん。ちゃんとアルコール消毒したよ」

「どこで感染するか分からないんだから予防できる所はちゃんとしなきゃね！」

サディア陣営を出た以降、フォッシュさんが過剰なくらい僕を心配してくる。心配してくれるのはありがたいんだけど、僕の手はアルコールまみれなんです。

「うへえ！ プリンちゃん、アルコールくさっ！ アルコールランプかよっ！」

「火は近づけちゃダメだよ!？」

「もう、指揮官くんは目を離すとすぐにトラブルに巻き込まれるんだから」

日常的にトラブルが起きてる母港が心配だよ、僕は。

「さあ、ロイヤル寮に着くんだから予防はしっかりとね！」

「ロイヤル陣営を何だと思ってるの!？」

「ほほー！ ここが噂の——」

「——ふざけた格好のKAN—SENがいる所か」

サンフランシスコさんとフォツシユさんは口を揃えて、ロイヤル寮に感心している。ロイヤル陣営かあ……一割くらいはマトモな子がいるよね、いるよね？

「ようこそおいで下さいました、ご主人様、サンフランシスコ様、フォツシユ様」

「二二「ようこそ、ロイヤル寮へ」二二」

ベルファストさんを筆頭に、扇形に並ぶメイド隊の派手なお出迎えを受けた……ん？

「シリアスさんだけ競泳水着なのは感染対策なの？」

「ええ……」

「草wwwwww」

「二二「……シリアス」二二」

僕の素朴な疑問に対して、フォツシユさんは若干引いてて、サンフランシスコさんは箸では無くバットが転がるくらい笑ってるし、メイド隊に至っては怒りを通り越して皆んな、眉間を抑えている。

「ダイドーもあんなドジをすればご主人様に構って貰える……？ シリアスは卑しか女杯……！」

「ダイドーちゃんはそのままが良いのよ」

「……はっ！ シリアスはまたドジをしてみましたのですか!? この卑しいメイドに罰を下さいます！ ベロチュー、氷移し、『人気のいない所に連れてって、ご主人様のパンパンに膨れ上がったソレをシリアスの蜜壺へ——』ひゃっ!？」

「シリアス……ムラムラしてくるので——コホン。続きは後にして着替えて来なさい」

ベルファストさんはシリアスさんの音読を遮り、着替えを促した。顔の血管がブチ切れそうに、そして自分の股を抑えながら。

「シリアスっていつもあんな感じなのー？」

サンフランシスコさんは近くにいるカーリユーさん、キュラソーさんに聞いた。

「いいえ。たまにやらかしますが、普段はあそこまではしませんよ」

「やらかすんだ……」

「どうしてだと思えますか、ご主人様？」

「えつと……あつ」

キュラソーさんのナゾナゾに頭を悩ませていると、一つの解答が浮かんできた。

「僕って暗殺の対象になってる……？」

「……は？」

あれ？ なんだか矛先が僕に向かっている気がするぞ？

「……ええ、ご主人様は狙われています」

「ベルファストさん？」

「いくら母港の皆様がご主人様にご好意を寄せているからとはいえ、それだけが全てと言えるのでしょうか？」

ベルファストさんは真剣な面向きで僕に問う。ベルファストさんの言葉には一理どころか、それ以外にも感情があるのが普通であると思う。時代劇やお侍のゲームも敵のお代官に、女の人の色仕掛けで懐に潜るシーンはよく見るもんね。

「そう……だよ。僕は少し浮かれていたのかもしれない」

割とシユンとするくらいには、僕に刺さる言葉として充分であった。

「ねえ、ハーマイオニー」

「どうしました、カリブデイス？」

「この茶番いつまで——むぐつ」

「ここは沈黙が正解よ。ほら、メイド長が発情中です」

「発情中なのwwww種付け式かよwwwwぷはは！」

このシリアスな空気をぶっ壊せるのは、さすがサンフランシスコさんだと素直に感動した。「呼びましたか、誇らしきご主人様!？」 頭の中で勝手に声が!?

「———ですのご主人様には、私ベルファストから女性の接し方をお教え致します。実技で、ですよ?」

「うん……うん? なんだった?」

さつきまでモテモテだからって浮かれるな、って話じゃなかったけ!?! アカン、ベルファストさんが初対面当時の掛かり気味だ! このままじゃ喰われる! 色んな意味で。

「女性への接し方の指導は私の役目ですが。ベル?」

「……グロスター様」

凜とした声の方を向くと、紫の髪色のメイド——グロスターさんがホウキとうねうねと動くデイ○ドを持っている。ん? デイ○ド……? メイド業務に使うランダナー（現実逃避）。

「……指揮官くん、ぼくはこの人達に指揮官くんの事が任せられそうにないよ」

「奇遇だね、フォツシュさん。でも僕は着任当時から不安だよ」

「あの秘書艦……ダイドーもボーイツシュかつ秘書艦になればご主人様と夜遊びができる……!?!」

「秘書艦を何だと思ってるの、ダイドーちゃん?」

「ご主人様はここに油を売りに来たのではないでしょう? さつきと義務を果たしなさい」

「うん、皆んな。例の感染対策の件なんだけど———」

「先ほどは失礼致しました、ご主人様。私達メイド隊も感染対策に積極的に取り組んで参ります」

ようやくマスクを配り終えて一仕事が終わった気がしてきた。人数が多いのもそうだけど、メイド隊の子たちがやたら、ボディタッチや『今夜、待ってます♡』と合鍵を渡してくるので、ベルファストさんやサンフランシスコさんが引っぱがす作業で時間がかかった。

「あ、あのうご主人様あ……一つ質問があります」

「大丈夫だよ、ダイドーさん。どうしたの？」

おずおずと手を挙げてダイドーさんは質問をした。

『濃厚接触禁止』とはご主人様からのハグや『お触り』も禁止になるのでしょうか……!?!」

この母港はいつから風俗と化したのだろうか。どのお店でも手を出すのは手錠モノだよ!?! ダイドーさんはふざけていなく、周りの子たちも真剣に耳を傾けている。誰ひとりツツコミがない恐怖。

「そもそも僕たち指揮官はKAN—SENの子たちにセクハラしないよ!?!」

「してくれないんですか!?!」

「何でソコ驚くの!?! むしろホツとする所でしょ!?!」

「今日のだ、ダイドーの下着の色は黒です!」

「別に申告しないでいいんだけど!?!」

「うおーい! プリンちゃんの下半身がホツトに——」

「言わせないよ!?!」

「ご主人様。今週、ベルファストは『危険の日』でございます。お覚悟を決めて下さいませ」

「僕が一番ホツとできないんだけど!?! 助けて、フォツシュキーン!」

「ごめんね、指揮官くん……ぼくも『危険の日』なんだ……」
「えっ……まさかご主人様？」

「違う違う、そうじゃない!? 僕たちそんな爛れた関係じゃないからね!」

「ぐぬぬ……ご主人様に触って貰えるように、布の面積を減らします!」

「更に減るの!? モラル大丈夫!」

「元々露出が多い方だと思ってたのですね……」

「プリンちゃん面白すぎて草wwww」

「何を騒いでいるんだ、指揮官?」

「あつ、ウエールズさん……」

メイド隊へのツッコミラツシユで疲弊した所に現れたのは、プリンス・オブ・ウエールズさん。

「マスク配りが随分と難航しているようだけど? メイド隊はそんなに気に入った?」

僕の仕事の遅さを皮肉混じりに言われる。僕がメイド隊に油を売っていると思われるようだ。

「あの、ウエールズさん? 僕に着任早々、ナンパする度量はないよ!」

「可愛いお嬢さんを二人も侍らせて、さぞご満悦でしょうね?」

「プリンちゃんのこと、可愛いお嬢さんだって!」

「僕!? フォツシユさんとサンフランシスコさんの事でしょ!」

「……ぼく、指揮官くんなら……良いよ?」

「なにがなの!」

「それは……ナニさ」

「————フンッ!」

「!？」

突然の轟音の方向を見るとウエールズさんの艦装から発射された、戦艦の砲撃がロイヤル寮の壁を貫いていた。見通しは良くなかったが、より一層状況は悪化していった。

「私の妹にツバ付けといて、私自身に手を出さないのはどういうこと？」

「修羅場で草wwwwww」

こつちからすれば、ウエールズさんの言い分に対してどういうことなの状態なんだけど……サディアでも聞いたけど、何故か誤解を受けているらしいし。今日会ったのって、ハウさんとセントルイス姉妹、リシユリユーさんだけなはずなんだよね。

「ハウ様に先を越されましたか……やはり清楚は頂点なのでしょうか……」

ベルファストさんは絶望感を瞳に宿して爪をガジガジと噛んでいく。

「ウエールズ！　なんか凄い音がしたけど——あつ、指揮官！」

「ハウさん！　ちょうど聞きたかった事が——」

「奇遇だな、指揮官。私達もだよ」

「アドーニスを虜にするなんて、なんと恐ろしい妹であろう……」

「もしも疾しい事がないのなら、ちゃんと答えられるよね？」

キングジョージ5世級が揃いにも揃い、僕への弾劾裁判が始まった。

「例え、絶倫で色を好む方でもシリアスは忠に従います。誇らしきご主人様！」

「それは欲に従ってませんか……？」

「アドーニスの情熱を私に向けてくれるなら、何も言わないわ……ふふ」

「うまい！ うまい！ 裁判中に食べるスナックは美味しい！」

「ジョージの無限列車編、ヤバいわよ☆」

「ご、ご主人様ががんばれー！」

「プリンちゃん！ 面白い展開待ってるぜー！」

「例え〇刑になっても、ぼくもすぐ追いかけるから！ 安心して良いよー！」

ロイヤル寮のサロンで模擬裁判を開き、被告人となった僕は手錠の代わりにグロスターさん手製の頑丈な首輪を付ける事になった。その首輪を繋ぐ鎖はグロスターさんが犬の散歩のようにしっかりと握られている。裁判長兼検察官役のウェールズさんは検察官の制服のコスプレまでしており、相当気合が入っている。ひよつとして楽しんでない？

「静粛に！ ——って私の味方誰もいないんだけど!? 何でジョージ達も傍聴席にいるのよ!?」

そういえばと思い、傍聴席を見るとさも、当然かのように傍聴席に座り、お菓子やクッキー、ワインを飲んでいる。

「そっちにいるより、こっちの方が本音が聞きやすいだろう？」

「こつちだと指揮官の顔を眺められるからよ！ 指揮官ー！ 首輪似合ってるわよー！」

「貴様の普段の行いではないだろうか。それよりアドーニスの奴隷姿が私を狂わせる……このまま私のものにしてやろう♡」

ここまでベクトルの向きが違う姉妹を初めて見たような気がする。ウェールズさんはお仕事良く出来るし、普段から助けられているけど、どんな行いしてるのだろうか。

「何!? それでもハウはこつちよ！ 重要参考人として必要なんだからー！」

ハウさんは『はい』と柵を乗り越えて、僕の対面となるところに座った。

「——こほん。指揮官、分かっているとは思うけど正直に答えて。あなたの名誉が掛かっているんだから」

「も、もちろんだよ。僕ですら状況を飲み込めてないんだけど……」

「指揮官。今日、貴方に深く接触した人物はハウ、セントルイス、ホルル——この三人で間違いない?」

「そうだね。その子達以外には挨拶したくらい程度だよ」

「やたらとハウさんがこちらに目を合わせている事以外は普通に進められている。何だろうか?」

「……本題に入ろう。ハウから聞いたんだが、○ックスしたのは本当か?」

「ええ!」

「いやいや、してないよ! てかなんでハウさんまで驚いてるの!」

「私も初耳よ! まあでも、指揮官ならデートを口実に——「ハウ?」何でもないわ」

「抜け出し失敗か。ウェールズが相手なら仕方あるまい」

「くくく、私達姉妹ならそうでなくては」

「姉妹二人が揉めているのを笑って見れているこの二人は一周回って、キングジョージ5世級って仲良いのでは? 僕は訝しんだ。」

「え? どういうこと?」 「なんか聞いていたのと違う……」 「誇らしきご主人様と夜の——」 「シリアスは卑しいです……」

「静粛に!」

傍聴席がザワつくのも無理はないだろう。なんせテーマの根底が崩れたのだから。この裁判、勝てる!

「指揮官、何があったか説明してくれる?」

「うん。実は——」

「——なに？ ハウにクッキーを食べさせただけ？」

「何でそんな噂になったのかは謎だけど、ハウさんの手作りクッキーを食べさせ合っただけなんだ」

「ふむ。ハウの説明不足といったところか。てっきり指揮官は豪胆な者だと」

「クッキーの食べさせ合いは羨ましいが、とんだ誤解であろう……」

「そうか……指揮官、疑ってごめんなさい」

ウエルズさんは深々と頭を下げる。僕自身、怒っている訳ではないので宥めた。

ん？ ハウさんがこちらにアイコンタクトを送っている。僕がそちらに意識を向けると、ハウさんは小さくジェスチャーを送っていた。解説してみると……

『下を見て』

何の事だろうと、ハウさんの顔から視線を落とすと——つ

!!!!

「指揮官はシロだった訳ね……」

ハウさんは僕の正面に座っており、ミニスカートを履いている。そんな彼女が少しでも足を開くと、『見えてしまう』訳で……。

「く、『黒』……かな？」

「は？」

デニールの濃いタイツなため、中の色までは判別しづらい……って何を鑑定しているんだ僕は!?

「やはりあなた達……」

「ち、ちがう違う！ 『白』だよ！ きつとそうだよ！」

再び目の色が変わったウエルズさんの後ろで、ハウさんはイタズラな笑みで僕を見てくる。謀ったな!?

「あら？ タイツが伝線しちゃってるわ。脱がないと——」

声は普段通りおっとりしているのに、からかいの目線を向けながらタイツを脱ぐ。

「ご、ご主人様の目が血走っています……っ？」

「あれこそご主人様がシリアスに向けるべき視線です！ ああ、こんな妄想をする卑しいメイドに罰を、バツをおお！」

「指揮官の獣の目線はあなののか。是非とも私に向けてもらいたいものだ、はははー！」

「もう一度聞いわ。貴方はシロなの、クロなの、どっちなの！」

「ぼ、僕はもちろん——」

彼女が脱いだタイトの先には——二つの太ももに挟まれた、上品な『青』が広がっていた。

「指揮官、ふざけてると良い加減に——！」

「ちなみに、今日のウェールズは『紫のレース柄』よ！」

「ちなみにとは何よ!? 橋本か!? 私の下着事情をバラさないで——ん……………？ もしや……………」

「ハウさんのは不可抗力だ！ あっ——」

「ふうん…………——指揮官、歯を食いしばって」

ロイヤル裁判所に、乾いた音が僕の頬から鳴り響いた。

「指揮官くん、大丈夫？」

「うん……誤解は解けた、のかな？」

「ぼくもスカート履いた方が良い？」

「セクハラを強要するつもりないよ!？」

「まだ誤解は解けてないぜー、プリンちゃん!」
「え?」

「ユニオンと鉄血、そして重桜で、指揮官の『大〇交スマッシュハ〇撮り』の噂が持ちきりだぜー!」

「d〇siteでありそうなタイトルは何!？」

「よりによつて重桜もか……指揮官くん、重桜はぼくら二人に任せてくれないかな?」

「……それは危ないよ」

「指揮官くんに重桜寮は危険すぎるんだ。貞操が奪われればマシな方だよ」

「それでマシなら、僕はどくなっちゃうの!？」

『『バラバラにされる』か『お仕置きを食らう』、『骨抜きになるまでお世話される』、『オサナナジミにされる』……まだまたありそうだ』

「重桜だけ異常に治安悪くないかな!?　ますます僕が行かないといけない気がするんだけど!？」

「プリンちゃんを失うなんてもつたいないじゃーん?　アタシ達がいるから安心していいんだぜ☆」

「僕が死ぬ前提なのやめて!　……まあ、そこまで言うなら重桜は二人に任せるよ。僕も後から追いかけるから!」

「周る順番はどうしようか?」

「アタシはどこからでもいいよ。最初に重桜でも良いけど、ははは!」
重桜は二人に任せるから、僕は『ユニオン』か『鉄血』のどちらを

先に回ろうか……。

分岐ルート発生です!

どちらかを先に選ぶと良いことがあります！（選ばれなかった方は I F ルートとして後日書こうかなと思ってます）

・ユニオンは戦力が高い子が多く、頼もしい戦力となりますが、人数が多いのでマスクを配り終えるのに時間がかかります。

・鉄血は少人数であるのでマスクを配り終える時間は早いですが、どうやら鉄血寮でお酒パーティが開かれているので、若干他陣営の子がいたり、絡みグセのある子達に絡まれます。

紛らわしい言い方になってしまいましたが、選択『風』のルートで、どちらに進むかは既に決めてあります。どちらに進むか予想したり、楽しみにお待ちください。

ウチの母港は清楚、清純、規律正しい風紀なのでどちらに進んでも B A D にはならないのでご安心ください。

「んでプリンちゃん、どっちから行くの?」
「そうだね、僕は――」